

道行きぶり

今川了俊著

応安四年(1371)四十一歳の了俊が、九州探題となって大宰府に赴く時の紀行文で、永和四年(1378)に再稿している。

歌は、応安四年二月二十日京都を発ち、桂川を船で下り山崎・播磨・備中・備後と西下し安芸国に入り、九月十九日海田から佐西の浦(ささいのうら)に着く。翌日巖島に参詣し、廿一日佐西の浦を発ち地の御前の社の西干潟より山路に入り、大野山中(おおのやまなか)を下り、再び大野浦という海辺に出た。それから山道を津葉(玖波)・黒河(小方)・こえ松・尾を松(東栄・油見辺りか)・小瀬川・岩国の多田にとどまる途中の大野の道中で詠んだものである。

これより了俊の感じた安芸路の場面を再現。

さて佐西の浦に着きぬ。廿日は巖島に詣で侍り。この島は、峰三つ四つばかり聳えあがりて、

深山木の年古りたるうちにまじりて、老いたる松の、岩上に生ひ傾きつつ、磯際まで繁りたり。

(中略)

廿一日は、この佐西を出でて、地の御前といふ社の西干潟より山路に入るほどに、大野山中といふ所に来ぬ。

長月の有明の月影、しらじらと残りて、木の下露は、まことに笠も取りぬべく、所狭き紅葉の色濃く見渡されたる中に、椎の葉の嵐に白く靡きて、松の声、山川の音に響き合ひたる朝朗け、身にしみて覚えたり。

とにかくに知らぬ命を思ふかな我が身五十路に大野山中

昔誰陰にもせむと蒔く椎の大野山中かく繁るらむ

古集に侍るやらん「向ひの岡に椎蒔きて」といふことの、ふと思ひ出で侍りてよめるなるべし。

この山分け下りて、また浦に出でたり。ここをも大野浦といふなり。向ひの山は、巖島山の南のはづれなりけり。行きめぐりて、なほ同じ所になりたるかな。今朝佐西の浦を出でてつる友の大船どもも、今ぞ追風に帆影も見ゆるめる。船なる人も、こなたをゆかしと見おこすめり。

大野浦をこれかと問へば山梨の片枝の紅葉色に出でつつ

この船どもの中に、朝餉あさげの営みするとて、煙の立ち上がつつ。浪なみに映ろふ景色、心あらん人に見せまほしかりき。

浪の上に藻塩あま焼くか見えつるは蟹あまの小舟に炊く火なりけり

それよりあなたは、みな山路なり。……………(中略)

(書き下し文)

そうして佐西の浦に到着した。二十日には巖島に参詣した。この島は、峰が三つ四つほど高く聳えあがっていて、深山木の、年輪を経た古木に混じって、松の老木が岩上に生え傾きながら、磯際まで繁っていた。

(中略)

二十一日には、この佐西を出発して、地御前という神社の西にある干潟を通過してから山路に入って行くうちに、大野山中という所にやって来た。

九月の有明の月光が、白々として空に残っていて、木からこぼれる露が、まさしくあの「みちぶらひ」の歌のように、雨のように落ちてきて、笠を被かぶって行かねばならないほどであり、あたり一面の紅葉の葉が色濃く見渡せる中に、椎の葉が嵐に吹かれて白く靡き、松風の声と山川の音が響き合って聞えてくる明け方は、身にしみて情趣を感じた。

とにかくに……(我がよわい 齢いも五十路そじにかかって、この大野中山を行くと、明日をも知れないはかな 儂い命の事を、あれこれ思うことだ)

昔誰たれ……(大野中山に、このように繁っている椎の木は、その昔、いったい誰が陰にしようと、種を蒔いたのであろうか)

この歌は古集にあったと思うが、「向ひの岡に椎蒔きて」という歌のことを、ふと思い出して詠んだものである。

この山を分け下って、再び海辺に出た。ここも大野浦というらしい。向い側に見えるのは、巖島山の南のはずれの山であった。めぐりめぐって、やはり同じ所に出て来たことだ。今朝、佐西の浦を出帆した仲間の乗った大きな船団の、今まさに追風にはためく帆の姿も遠くに見えるようだ。船に乗っている人も、こちらの方をなんとなく慕わしいと思いやっているだろう。

大野浦を……(大野浦という所はここかと尋ねたところ、山梨の片枝の紅葉がはっきり色に出しながら答えていることよ)

この船どもの中に、朝食の支度をするというので、その煙が立ちのぼりながら、波に映じている光景は、情趣を解する人に見せたいほどだった。

波の上に……(波の上で藻塩を焼いているのかと見えた煙は、実は海女が舟で朝食を炊く煙だったよ)

【註】

大野山中……地御前と大野の間に中山という峠がある

長月の有明の月影……陰曆九月の有明方の月光。情誼深いもとされた

シイ……ブナ科の常緑高木

船なる人…了俊に随行した九州諸豪族で佐西の湊の軍船の人々
山梨…山中に生えるバラ科の落葉高木 秋に果実がなる
この船ども…大野浦の漁師の船

【参考文献】「中世日記紀行集 稲田利徳 訳」所収新編日本古典文学全集48 小学館 1994
訳者 稲田利徳(いなだ としのり)
1940年愛媛県生れ。広島大学卒。中世文学専攻。岡山大学教授。